小学生区分　佳作

鹿児島県

みんな同（おな）じだよ

鹿児島市立吉野東（かごしま　よしのひがし）小学校　四年
石原（いしはら）　希理（きらり）

わたしのお父さんはさか子で生まれて、のうせいまひになったそうです。そのため、足がふ自由になり、人と少しちがった歩き方をします。小学生のころは、運動会や持久走大会などで走りきると、みんなの前にしょうかいされて

「よくがんばったね。すごい。」

とほめられていたそうです。だけどお父さんは、「みんなと同じ事をしただけなのになあ」といつもほめられる事にぎもんを持っていたそうです。そんな風に思えるお父さんは、心が強いなあと思いながら話を聞いています。

そんなお父さんのしゅみは、車イスバスケです。去年には、鹿児島で開さいされた国体にも出場しました。車イスバスケは、足のふ自由な人たちが車イスに乗ってプレーするスポーツで、車イスが体の一部になっているように、とても上手にそうさしています。わたしもやった事がありますが、手だけでそうさするのがとてもむずかしかったです。

お父さんのチームメイトには、足が動かなくなって車イス生活の人もいます。車イスから車に乗りうつったり、運転したりするのも一人でできます。ふだんの生活や仕事も、わたしたちと同じようにしています。どうしてもむずかしい事は、高い所に手がとどきにくかったり、階だんや高いだんさをこえられない事です。

わたしは小さいころから、車イスで生活しているお父さんの友達といっしょに遊びに行く事が多かったので、車イスで生活している人のできる事や、むずかしい事を自ぜんと知る事ができました。そのため、車イスで生活していたり、体にふ自由な部分があるからと言って、わたしたちとちがうと言う事ではなく、むずかしい事はいっしょにすればいいだけだと考えています。わたしたちも、体かくのちがいや、とくいな事ふとくいな事がそれぞれあるのと同じだと思います。

お父さんが小学生のころに、みんなの前でほめられた時に「みんなと同じ事をしただけなのにな」と思っていたのは、そう言う事なのだとわたしは感じています。

わたしたちは、車イスの人や体のふ自由な人を見かけると、とくべつな目で見てしまいがちです。

自分中心の目線ではなく、その人の気持ちを考えた「みんなと同じ」と言う目線でせっする事が大切だと言う事を、みんなに伝えていきたいです。

小学生区分　佳作

岐阜県

ぼくが楽しく学校に行けている理由

岐阜市立岩野田小学校 三年
神谷 謙成

ぼくは、生まれつきなんちょうです。人工内耳の手じゅつをして聞こえるようになったけど、全部聞こえているわけではないので、いろいろな事を学校の先生や友だちにきょう力してもらっています。

じゅ業の時は、先生にロジャーという人工内耳にちょくせつ声をとどけるきかいをつけてもらっています。クラスのみんなは、発表する時にパスアラウンドマイクというロジャーと同じやくわりのマイクを近くにおいて話してくれます。先生の声やみんなの声が分かりやすくなって、うれしいです。それに先生は、ロジャーを使う時は、オンにして使わない時は、けして使いわけてくれます。ぼくは大切なことを聞きのがしたくないので、ちゃんとオンにしてほしいしひつようのない時はうるさくなるからけしてほしいです。それをいつもちゃんとしてくれるのでうれしいです。

あと、とても助かっていることは、プールの時のフラッシュカードとホワイトボードです。プールの時は、左耳しか人工内耳をつけてないし、ロジャーも使えないし、カバーもつけるのでいつもより聞こえにくくなります。た分半分くらいは聞こえているけど、聞こえてなかったらどうしようと不安になります。でもフラッシュカードとホワイトボードで目で見て分かるようにしてもらえたら、10のうち7あった不安が3まで少なくなるのでこれからも使ってもらいたいです。

毎年クラスのみんなや学校のみんなに、ぼくのきこえについて話しをします。先生は毎回一緒に内ようを考えてくれたり、テレビにうつしだしてくれたり手つだってくれるのがうれしいです。

いつもぼくがわかるようにしてくれるけど、それでも聞こえにくいときは、目で見てわかるようにジェスチャーや文字を書いて見せてほしいです。

たくさんぼくがわかるように助けてくれてありがとうございます。もし助けがなかったら、た分不安が10のうち8あるんじゃないかなあと思います。でもみんなのおかげで、不安が0になります。だから楽しく学校に行けます。これからも助けてもらえたら、うれしいです。

小学生区分　佳作

京都府

笑顔はみんなを救う

京田辺市立田辺小学校　六年
常石　龍叶

ぼくの学校には「くすのき学級」という特別支援学級があります。ぼくのクラスの友達のこうちゃんは、くすのき学級に通っています。４年生のときに初めて同じクラスになりました。一緒に活動をしていく中で、ぼくはこうちゃんの事が大好きになりました。笑顔がとってもかわいいのです。

こうちゃんはうまく言葉が出せません。でも顔を見ると、怒っている、困っている、喜んでいる、というのが表情で分かります。ぼくは、こうちゃんが笑ってくれるのがうれしいし、かわいくてたまりません。

こうちゃんは静かにしないといけない場面でも声が出てしまったりします。学年集会の時も声が出てしまったときに先生が

「だまれ」

と言ったのが聞こえました。ぼくは胸がキューっと痛くなって、とても悲しい気持ちになりました。こうちゃんはわざと声を出しているわけではないと思います。注意をするにしても、もう少しこうちゃんにも分かる言葉で伝えてもらいたいと思いました。

あるときは、クラスの友達がこうちゃんとあそんでいるつもりであっても、からかうような感じになることがありました。こうちゃんがやめてと言ってもやめなかったので、こうちゃんが怒って手を出すことがありました。その行動をこうちゃんは先生から指導されていました。何だかぼくはモヤモヤした気持ちになりました。こうちゃんがうまく言葉を出すことが出来ないのは、みんな分かっているはずです。そんな中でも

「やめて。」

と主張したこうちゃんはえらいと思いました。本当はそこでやめてあげないといけないし、自分が楽しいと思っていても相手がいやな気持ちになっていると気付かないといけないと思いました。

手を出してしまったことは悪いことです。でも、うまく言葉を出すことができないこうちゃんの精一杯の抵抗だったのだと思います。そこまで追い込んでしまった。なので、こうちゃんがかわいそうに思えました。

ぼくもいやな事があった時にうまく言葉に出来ず感情的になることがあります。そうなると話が進まなくなるので、落ち着いて話すようにしなければいけない、と思っていても中々コントロールがむずかしいです。だからぼくは、こうちゃんの気持ちがよく分かります。こうちゃんもぼくと同じだと思いました。障害があるとかないとかではなく、人それぞれ得意なこと不得意なことがあると思います。不得意なことが同じ人は分かり合うことができるし、得意なことがある人は助けたり歩み寄ったり出来ると思います。

ぼくはこうちゃんが大好きです。こうちゃんがぼくを見て笑ってくれるととてもうれしくて、手をつなぎたくなるし話したくなります。これからも大切な友達でいてもらいたいです。

みんなが笑ってくれたらぼくはうれしい気持ちになります。だからぼくはこれからも、友だちの気持ちに歩みより、みんなを笑顔にさせる人になりたいと思いました。

小学生区分　佳作

大阪市

きこえる友だちのサポートに感謝

大阪市立北中道小学校　六年
前田　琉唯菜

給食の時間が開始され、自由に席を替えて食べることが可能なので、同じクラスにいるもう一名のきこえにくい子と、きこえる友だちと一緒に机を付けて食べ始めました。

突然、きこえる友だちが

「二人は、どうやって手話を覚えたの。」

と、質問をしてきました。

（手話は、入学前に聴覚支援学校の幼稚部に通っていた時から使っていたし、どうやって覚えたのか記憶がないな。）

と、頭を抱えました。

「手話をどのようにして覚えたのかあまり覚えていないけど、先生が手話で表されるのを見て真似をして覚えたと思う。」

と、友だちが納得のいく説明ができたか自信がなくて不安げに伝えました。

きこえる友だちは納得していた様子だったので、ほっとしました。

一緒に食べていた、きこえにくい子が

「最初に覚えた手話は、『おいしい』だよ。二人が初めて覚えた手話は何かな。」

と、質問をしてきました。

「初めて覚えた手話は何か、覚えていない。何だったかな。」

と、首をかしげていると、きこえる友だちが

「初めに覚えた手話は『一緒』かな。」

と、うなずきながら言いました。

（一緒に何かをしようと誘うため、『一緒』という手話をまず覚えてくれたのかな。気持ちが伝わるようでうれしいな。今まで手話について会話したことがなかったけど、手話に興味を持ってくれていたのかな。）

と、感動してしまいました。

次の日の一時間目は、音楽の授業でした。担任の先生が、開口一番

「運動会で応援団が歌う歌をかけてみます。一度聞いてみましょう。」

と、説明をされ、すぐに曲がかかりました。

パソコンをモニターに接続し、モニターから音が出ていたので、モニターの所にワイヤレス補聴援助システムのマイクを先生が置いてくださったので大きめの音で聞こえていました。どんな曲か必死に聞いていました。

昨日、手話について会話したきこえる友だちが、突然、隣の席から合図をしてきました。

その友だちは、続けて何か言いましたが、マイクから大きな音で曲が聞こえていて、聞き取れませんでした。

「音楽が大きく聞こえていて、聞こえなかったから、もう一度言ってくれる。」

と、即座にお願いしました。

友だちは、快くもう一度言ってくれましたが、やはり聞こえず、困っていると、自由帳を取り出し、何か書き始めました。

『応援団がセリフを言うとき、白や赤からイメージすることばを言うので考える。』

と、先生が指示されたことを書いてくれました。

『分かった』と手話でまず表しました。

「先生が指示されたんだね。音楽が大きく聞こえていて分からなかった。書いて教えてくれてありがとう。白からイメージするのは、マスクかな。」

と、お礼を伝え、思いついたことばを言いました。

友だちは、笑顔で『ｏｋ』と手で表してくれました。

（手話に興味を持ってくれ、聞き取るのは難しいと判断した時は、文字で伝えてくれたのでうれしいな。雑音が多くて聞き取れないことが多いので、見て分かりやすいように配慮して伝えてもらうととても助かり、ありがたいな。）

と、心から感謝しました。

その後、歌う時や楽器を演奏する時は、きき取りにくいことが多く、あまり得意ではない音楽の授業に気分よく参加することができました。

笑顔から得られるもの

東京都
青山学院初等部　六年
三浦　優

私の学校では、試験休みに選考された希望者が滋賀県東近江市にある止揚学園に行きます。昨年私は止揚学園に行ってみようと決意し、本当に沢山のことを学びました。

止揚学園は障がい児のための家として一九六二年に福井達雨さんによって作られました。今は大人になった障がいのある方ない方みんなの家になっています。私はそれを事前授業で知りました。発達障がい知的障がいについても初めてちゃんと意味が分かりました。私や私の周りの人はみな「普通」に生活できていますが、そうでない人たちのことも知ろうと出発に向けて思いました。

どきどきの一日目、新幹線で東京から能登川駅に着きました。

「よく来たねえ。」

と言いながらお迎えに園から何人か来てくださいました。私はもういきなりかつみさんという明るくて元気でよくしゃべる人に手をにぎられました。この時私は驚きました。普段急に手をにぎられることなんてないからです。でも一度冷静になって考えてみると、知らない小学生と仲良くしたくて手を握ったのかな、と思いました。手がずっと温かく、心もずっと温かったです。歩いて見えた止揚学園はきれいで、ほとんどの色は赤や黄などの分かりやすい色でした。そして、建物は清潔で廊下はぴかぴかでした。なぜそんなにきれいなのかは夕食の後に分かりました。それは毎日ぞうきんがけをしているからです。タイルになっているお風呂もそうじしました。生活するとき気持ちよく過ごすためにはこのようなそうじも必要なのだと分かりました。

二日目の午後、仲間たちと運動会をしました。止揚学園では障がい者を障がい者と呼ばず、「仲間」と呼んでいます。そこも止揚学園のいいところだと思います。運動会でしたポッチャン大会はボッチャのような競技で、ボールを真ん中の大きいボールに近づけた人の勝ちです。大きいボールをコイ、投げるボールをえさとして、

コイにえさを一番近くにあげられた人の勝ちと分かりやすいように言ってくれました。私は止揚学園のはやとさんときよみさんと一回ずつチャレンジしました。二人とも全然コイに近くありませんでしたがにこにこですごく嬉しそうに笑っていて、私たちも一緒に笑いました。成功しても失敗しても笑い合えるのはいつも笑顔な仲間たちのおかげだと思います。笑顔を絶やさずに過ごすと人生は幸せだな、と思いました。

安土城跡に登った一日遠足では仲間たちの感情表現が少し分かりました。感情を表に出して楽しんでいることがよく伝わる人もいれば、あまり伝わってこない人もいました。人によって得意不得意があるのでその違いを認め合えるような世界になってほしいです。

最終日になってしまうともうあっという間でした。前日に見た美しい滋賀県にいたかったし、何より止揚学園の仲間たちと別れることがさびしかったです。帰る前に全員と握手をしました。握手をしていると出発するのがさらにさびしくなっていました。

「また来てね。」

と言ってくれたのと仲間たちがいてくれたことでまた会おうと思いながら別れることができました。全員でお見送りをしてくれてうれしかったです。みんな笑って幸せそうでした。私はその光景を見て、私も見習って笑顔で過ごそうと思いました。

私は今年も止揚学園へ訪れて学びたいと思い応募し、選んでもらえました。去年は多くのことを学べました。今年はさらによく体感したり考えたり楽しんだりしてより多くのものを得たいです。仲間たちの沢山の優しさ、明るさを知ったので世界中の他の人にも心を込めて行動し、笑顔でいながら優しくしていきたいです。